

建文帝の諡号について (4)

Evaluating Ming Emperor Jianwen
from the Perspective of his Posthumous Title (4)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

この『明史』の記述によると、「建文」の年号を復活させるよう決定した、と理解できる。ただ、これは省略された書き方であり、その意味するところは、萬曆『實録』でいうように、「建文」の年号を用いて建文帝の事跡を記述し、それを太祖洪武帝の最後に附記することを認める、というものであった。

後で検討するように、「建文」の年号を復活させるというのは、「建文」の年号を用いて建文帝の「實録」を編纂するということであった。

ただし、この編纂作業はすぐに中断したようだ。したがって、復活の決定はなされたものの、実質的には「建文」の年号は、復活しなかったことになる。このことについては、「建文」の年号の復活を改めて求めた劉曰梧の萬曆三十八年（一六一〇）八月九日の疏を検討した後に、考えてみたい。

さて、「建文」の年号の復活が決定する、つまり「建文」の年号を用いた建文帝の「實録」を編纂することが決定すると、続いて建文帝に諡号を贈るべきだとする提案がなされるようになる。ただ、諡号を考えるということは、これまでの提案と異なり、建文帝をどのように評価するのかということにかかわってくる。

諡号について提案したのは、楊時喬（字は宜遷、号は止菴。江西上饒の人。嘉靖四十四年乙丑科（一五六五）二甲四十一名の進士）と詹沂（字は浴之、号は魯泉。直隸宣城の人。隆慶五年辛未科（一五七一）三甲一百八十二名の進士）などである。「建文」の年号を用いて「實録」を編纂すると決まった次の年

の萬曆二十四年（一五九六）九月のことである。

『讀禮通考』に引く『南京大常寺志』⁽¹⁾によると、つぎのように願い出たという。

〔南京大常寺志〕萬曆二十四年九月、南京大常寺卿の楊時喬・少卿の詹沂^{など}等 上言するに、建文帝 天下に臨蒞すること五年、其の爲す所の政は國史に載在す。生まれて爵有れば則ち没して宜しく謚號有るべし。遜位（讓位）を以て言えば則ち高皇帝（太祖洪武帝）の元の〔最後の皇帝である〕順帝に追謚するに比す可し。親親を以て言えば則ち憲皇帝（憲宗成化帝）の景皇帝（景泰帝）に追謚するに比す可し。且つ永樂の初め、文皇帝（永樂帝）の詔もて〔建文帝を〕喪葬すること儀の如くして、官を遣りて祭を致す。蓋し嘗て〔建文帝を〕葬祭するに天子の禮を以てするなり。今、宜しく之が園陵を立て以て先德を成し、天下後世をして遺議有らしむること無くすべし。又た若し招魂の典を行ない、國厲の壇（厲壇：祭祀の途絶えたものを祀る祭壇）を立てば、國家 嘗て之を以て衆庶を待つなり。〔そうすれば〕此に於いて何ぞ獨り然らざらんや。臣 〔以下のように〕請う。〔太祖洪武帝の〕孝陵の左・〔懿文太子の〕東陵の前に於いて一享廟を建て、名は陵殿（陵墓の傍らの配殿）を以てし、設主（位牌を設ける）し、祭を致し、其の難を同じくする后妃を以て配食（配享）し、并せて諸子の晩出を以て高墻（牢獄）にありし者は、其の葬る所を尋ね、之を表識す。孤魂（よるべのない靈魂）と等しくせしむる無し。此れ皆な義を以て起こす可し。

（1）汪宗元（字は子允，号は春谷。湖廣崇陽の人。嘉靖八年己丑科（一五二九）三甲二百九名の進士）の撰した『南京大常寺志』は、『四庫全書總目提要』の存目に分類されているが、今のところ目睹しえない。そこで、拙稿では、『讀禮通考』所引のものによった。

なお、『四庫全書總目提要』によると、『南京大常寺志』は、つぎのように評価される。

明の汪宗元撰。〔汪〕宗元 號は春谷，崇陽の人，嘉靖己丑（一五二九年）の進士，官は總理河道右副都御史に至る。是の書は乃ち〔汪〕宗元の南京太常寺卿爲りし時の輯する所なり。謨訓・規制・職官・禮書・樂書・舊制・薦獻・祭告・祭器・祿食・夫役・列傳に分ちて十二門と爲す。記す所は，各々の祀の祝文・陳設及び樂章・樂器なり。皆な『明會典』・『〔明〕集禮』の諸書に較べて備われりと爲す。薦獻の品物・應祀の宮觀及び署中の藏經字號・存貯の什器に至れば，皆な條列して遺さず（『四庫全書總目提要』卷八十・史部三十六・職官類存目・「南京大常寺志十三卷」条）。

實に天理人心の共に以て當に然るべしとする所の者なり。近ごろ臺省の諸臣の建文の年號を復せんことを請うを経て、禮部 覆議し、欽諭もて高皇帝（太祖洪武帝）帝紀の末に附載し、仍お其の年號を存す、と。今、加うるに廟・諡を以てすれば則ち禮制 咸な備わり、天下後世 誦法（称えて見習う）し、且つ不朽ならん（『讀禮通考』卷九十三・葬考十二・山陵六・六葉・「建文帝」条所引「南京太常寺志」）。

建文帝は五年間国を治めたことは、国史に記載されている。当然、諡号があるべきである。いま、太祖洪武帝の孝陵の左・懿文太子の東陵の前に廟を建てて祭祀することを提案する。また、先ごろ建文の年号を復活させることになったのであるから、それに廟と諡を加えれば、制度上完璧となる、と提議したのである。

『明史』楊時喬傳にも、年月は記されていないが、

疏もて建文帝の諡を議し、死節の諸臣を祠祀せんことを請う（『明史』卷二百二十四・列傳第一百十二・楊時喬）。

とある。

萬曆『實錄』には、これに関する記述が見当たらないが、この提案は認められなかった。

その後、萬曆二十七年（一五九九）から萬曆二十九年（一六〇一）の頃に、沈子木（字は汝楠、号は玉陽。浙江歸安の人。嘉靖三十八年己未科（一五五九）三甲二十九名の進士）が、建文帝の祭祀について提案した。

孫鑛（字は文融、号は月峰。浙江餘姚の人。萬曆二年甲戌科（一五七四）二甲四名の進士）の書いた沈子木の墓誌銘（「南京都察院右都御史玉陽沈公子木墓誌」）によると、沈子木は、建文帝の父の懿文太子は、祭祀されているが、建文帝にはないことを痛んで、疏を書いたという。

……己亥（萬曆二十七年：一五九九年）、南京太常寺卿閔掌故に起こさる。懿文太子は四時に祀有るも、建文君は獨り祀無きを痛み、乃ち一疏を草して曰く、皇上（神宗萬曆帝）孝を以て天下を治めること殆ど三十年なり。

欣として祖宗の諸々盛典を承け、釐舉（整理して用いる）せざる無し。〔ただ〕獨り建文の祀の久しく缺くも、未だ言うもの有らず。臣 竊かに〔以下のように〕謂えらく。建文君は高皇帝（太祖洪武帝）の孫・懿文太子の嫡長子にして、五年の御宇あり。統 順にして、系 明かなり。即ち成祖（永樂帝）の時に當りて、且お先臣の王景の議を用い、⁽²⁾ 天子の禮を以て葬り、官を遣りて祭りを致し、輟朝（朝議を停止する）すること三日なり。〔これは〕則ち成祖（永樂帝）の其の祀を廢するを欲せざること知る可きなり。相い沿りて今に至り藐として成説（定論）無し。生まれて金潢玉牒の主と爲り、没しては斷蓬（ただよう）飛草の怨を銜むこと、赦含餒伯も依る無き有り、亦た悲しからずや。皇上（神宗萬曆帝）御極（即位）の初年に特に節に死するの諸臣を念い、褒祀の詔を下さる。伏して制詞を讀むに「聖祖の遺意を仰ぎ遵いて、忠魂を褒表す。夫れ建文に忠なる者は、且に祀らんとす」と曰う有り。乃ち建文 獨り祀るを得ざらんや。弘治の時（弘治十二年〔一四九九〕）、禮部主事の楊循吉 曾て景皇帝を以て比すと爲し、追諡（諡号を追贈する）を議す。夫れ諡は且當に議すべきなれども、則ち祀は尤も宜しく急ぎ議すべし。今の世の疑う所の者は倫次の間を謂うに過ぎず。稱號は定め難し。是れ禮は情を以て伸び、數は時に緣りて降る。〔だ

（２）王景、字は景彰、号は常齋。松陽の人。？～永樂六年（一四〇八）。七十三歳で歿している。陳璉（江西進賢の人。成化二年丙戌科（一四六六）三甲五十三名の進士）の「翰林院學士奉政大夫常齋王公景墓碑銘」にいう。

靖難の時に言う、建文 歿し、上（永樂帝）〔王〕景に葬禮を問うに、〔王〕景 頓首して宜しく天子の禮を用いるべしと言ひ、上（永樂帝）之に従う（『獻徵錄』卷二十・翰林院一・學士・「王景」条所引「翰林院學士奉政大夫常齋王公景墓碑銘」・二十葉）。

建文帝が亡くなった時、永樂帝がその葬禮を王景にたずねた。すると、王景は天子の禮を用いるべきだと答え、永樂帝は、それに従ったとある。

また、『明史』では、すこし文言を変えて、

……成祖 即位し、〔王景は〕學士に擢せらる。帝 建文帝を葬るの禮を問う。〔王〕景 頓首して「宜しく天子の禮を用うべし」と言う。〔永樂帝は〕之に従う（『明史』卷一百五十二・列傳第四十・王景傳）。

とする。

から] 弟だ●^た蟹（ちっぽけな）の一俎（祭祀の具）を獲るは、猶お湮絶にして存せざる者より愈^{まさ}れり。臣愚 以爲らく留都は誕育の區・臨蒞の地なれば、憑依する所に生じ、魂魄 遠からず。宜しく其の處に卽く、或いは高皇帝（太祖洪武帝）の側に耐すべし。……（孫鑪『月峰先生居業次編』卷五・二十三葉～二十四葉・「南京都察院右都御史玉陽沈公子木墓誌」）。

建文帝は、太祖洪武帝の嫡孫で、五年間天下を統治した正統な後継者である。永樂帝は、建文帝を葬るのに天子の禮をもちい、祭祀を執り行ない、朝議を三日間停止した。ここからすると、永樂帝は、建文帝の祭祀を廃止しようとしなかったことが分かる。だが今に至るまで建文帝をどう処遇するかについて定論がない。現在の神宗萬曆皇帝は、即位直後に、建文帝に忠節を尽くした臣を表彰して、祀った。なのに、建文帝は祀らないのだろうか。弘治十二年（一四九九）に、楊循吉が景皇帝（景泰帝）と同じように取り扱うようにとし、諡号について提案した。当然、諡号は議論すべきであるが、それよりも建文帝の祭祀を性急に考えるべきである、と沈子木は考えたというのである。

この疏は、

疏 具わり、將に上まつらんとするに、會たま青宮の冊立ありて、少しく待てり（孫鑪『月峰先生居業次編』卷五・二十四葉・「南京都察院右都御史玉陽沈公子木墓誌」）。

とあり、皇太子の冊立問題のため、提出を待ったという。

周知のように神宗萬曆帝は、皇太子の決定を先延ばしにしていた。

『國權』に、

〔萬曆二十九年十月〕己卯（十五日）、皇太子常洛を立つ（『國權』卷七十九・四八八四頁・神宗萬曆二十九年十月己卯（十五日）条）。

とあり、『明史』に、

〔萬曆二十九年〕冬十月己卯（十五日）、皇長子の常洛を立てて皇太子と爲す……（『明史』卷二十一・本紀第二十一・神宗二）。

とあるように、ようやく、萬曆二十九年（一六〇一）十月十五日に、長子の

常洛が皇太子に立てられる。したがって、「會たま青宮の冊立ありて」とは、冊立についての議論が始まり、立太子に至るまでの期間を指しているのであろうか。

また、萬曆『實錄』によれば、沈子木は、萬曆二十七年（一五九九）七月二十一日に南京太常寺卿となり、萬曆二十九年（一六〇一）六月二十六日に通政使に配置転換している。したがって墓誌銘の記述によれば、沈子木のこの疏は、萬曆二十七年（一五九九）七月二十一日から萬曆二十九年（一六〇一）六月二十六日の間に書かれたと考えられる。

さて、沈子木の提案は、『實錄』には記載がないが、萬曆二十九年（一六〇一）七月二十二日以前には禮部に送られた。これを受けて禮部は、萬曆二十九年（一六〇一）七月二十二日に、建文帝の父の懿文太子の廟の側に建文帝の廟を建てて祭祀を行ないたい、ということに革除された諸臣をも加えて祭祀を行ないたいと提議したが、そのままになってしまった。

[萬曆二十九年七月] 丁巳（二十二日）、禮部 言えらく、建文皇帝の祀典久しく湮^{しず}めり。[そこで] 懿文太子廟の側に於いて別に一廟を立て、四時 祭祀を致さんことを請う、と。報ぜられず。是れより先、通政使の沈子木 言えらく、建文の祀典 宜しく久しく湮^{しず}ますべからず、と。疏 禮部に下る。是に至りて禮部 覆し、上（神宗萬曆帝）に意を加えて遼國の諸臣を表章するを請う。而れども此の疏 尚お未だ舉行されず、亦た待つ有り（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百六十一・「萬曆二十九年七月丁巳」条）。

『國榷』では、沈子木の提案に、禮部が回答したが認められなかったという。

[萬曆二十九年七月] 丁巳（二十二日）、禮部 「南京太常寺卿の沈子木 建文帝を祀り、宜しく懿文太子の廟の側に専ら祭るべきを請う」を覆するも、報ぜられず（『國榷』卷七十九・「神宗萬曆二十九年七月丁巳」条・四八八〇頁）。

なお、沈子木の官職を『實錄』では「通政使」とし、『國榷』では「南京太

常寺卿」としている。つまり、『國榷』によると、沈子木の提案は萬曆二十九年（一六〇一）六月二十六日以前となる。

この時期には建文帝の「實錄」の編纂作業は中断し、「建文」の年号は実質的には、復活が見送られることになっていた。そこから、つぎの劉曰梧（江西南昌の人。萬曆十四年丙戌科（一五八六）三甲百三十六名の進士）の提案がなされることになる。

萬曆三十八年（一六一〇）九月九日に、劉曰梧は、建文帝の諡号・廟・年号・陵墓について考えるように願い出たのである。なお、神宗『實錄』にも、同じ内容の劉曰梧の疏が載せられているが、⁽³⁾『讀禮通考』所引の「南京大常寺志」引くところのものがより明晰であるようなので、こちらから引用する。⁽⁴⁾

〔萬曆三十八年（一六一〇）^①八月，南京太常寺少卿の劉曰梧〔以下のように〕上言す。夫れ建文君は他に非ず。高皇帝（太祖洪武帝）の嫡孫にして懿文太子の嫡子なり。洪武二十五年（一三九二）に懿文太子 薨じ，奉冊され，立ちて皇太孫と為る。三十一年（一三九八），高皇帝（太祖洪武帝）升遐し，神器を擎げて之を授けられ，天下に君臨する者五年なり。寛仁

〔3〕萬曆『實錄』には、この「南京大常寺志」引用の文章の前に、つぎのような文が載せられている。

〔萬曆三十八年（一六一〇）九月辛亥（九日）〕南京太常寺少卿の劉曰梧〔以下のように〕上言す。臣備員 常に祭祀するを奉じ，以て駿に鍾山の〔太祖洪武帝の〕孝陵に奔りて在り。一歳に凡そ三つの大祭・五つの素祭す。東のかた數百武を去りて〔懿文太子の〕東陵と為す。東陵は懿文太子の寢廟なり。一歳に凡そ九つの大祭・一つの素祭。諸陵に視べて加禮有り。其の中に深意有るに似たり。獨り懿文太子 舊と〔懿文太子には贈られた〕興宗孝康皇帝の號有るも，今は仍お故太子とのみ稱するは，則ち革除を以ての故なり。故に建文君の號 崇とばれず。懿文太子の號を削るるは，得て議する可からず（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之四百七十五・「萬曆三十八年（一六一〇）九月辛亥」条）。

太祖洪武帝の孝陵は，一年に三大祭・五素祭を行なっている。その東にある懿文太子の東陵は，一年に九つの大祭・一つの素祭を行なう。これは，他の皇帝に比べても多い。そこには深い意味があるようである。そもそも懿文太子は，「興宗孝康皇帝」と諡号が贈られていたが，今は「故太子」とのみいう。革除のためであるとされている。そのため，建文帝の号は貴ばれない，とする。

恭讓にして大いなる失徳無し。第だ文柔不斷なるを以て更張（改革）に序無く、怨を宗親に取る。文皇帝（永樂帝）祖訓に遵いて、兵を稱して内を靖んずとす。而して建文君遂に位を遜る。〔これは〕家庭の禪受にして、易姓の嫌有るに非ざるなり。鍾虞（猛獸の飾りのあるかねかけ：『新唐書』于公異傳に「鍾虞不移」）移らず、社屋（社廟）の働有るに非ざるなり。傳え聞くに金川の守りを失いて、建文君の宮を闔ざして自焚すと。文皇帝（永樂帝）其の遺骸を煨燼の中より出だし、之に哭して曰く、孺子何ぞ此に至るや、と。旋いで侍講の王景の言を用い、葬るに天子の禮を以てす。乃ち當時の持祿保位の徒は、患得患失（自分のちょっとした損得にくよくよする：『論語』陽貨にもとづく）し、一意に逢迎し、復た議して祔祀（祖廟に合祀する）・謚號・山陵等の禮に及ばず。遂に千古をして名義を沈淪さし、湮鬱せしむること二百餘年に垂なんとす。大いに一代の缺典と爲す。此れ文皇帝（永樂帝）の過に非ざるなり。夫れ生まれて君主と爲り、歿して謚號無く、既に太廟に入祔（宗廟に納めて祭祀する）するを得ず。又た別に専ら祀を享るを得ず。封樹識る莫し、魂魄依る無し。此れ忠臣義士の飲泣する所にして、田夫野老の吞聲する所の者なり。臣（劉曰梧）

✓（４）『國權』は、つぎのように要約する。

〔萬曆三十八年（一六一〇）九月辛亥（九日）〕南京太常寺少卿の劉曰梧〔以下のように〕上言す。懿文太子の寢廟は、歳ごとに大祭九・素祭一あり。夫れ高皇帝（太祖洪武帝）の太廟に日祭有り。故に陵は數を欲せず、懿文は猶お加禮あるがごとし。豈に舊の興宗孝康皇帝（懿文太子）にして今猶お太子がごときに非ずや。建文君は嫡孫を以て天下に臨むこと五年なり。第だ文柔不斷にして、怨みを宗親に取り、難を靖んずる（靖難）もて兵を稱す。〔これは〕易姓の禍有るに非ざるなり。鍾虞移らず、宮を闔して自焚す。〔そして〕葬られるに天子の禮を以てす。當時の持祿保位なる者は、患得患失し、一意に逢迎し、未だ謚・祔（合祀）を議さず。遂に名義をして沈淪せしむること二百餘年に垂なんとす。封樹識る莫し、魂魄何に依らん。此れ忠臣義士の飲泣を爲す所にして、田夫野老の吞聲を爲す所なり。乞う廷議に下し、追謚し廟を立て、其の年號を復し^①、山陵に封表し、或いは懿文太子の廟に祔（合祀）して祭りを同じくし、仍お懿文の帝號を復し、以て高皇帝の在天の靈を慰めよ、と。報ぜられず（『國權』卷八十一・「神宗萬曆三十八年九月辛亥（九日）」条・五〇二四頁～五〇二五頁）。

①「建文」の年号の復活については、以下で検討する。

嘗て別録に載するを閲るに「文皇帝（永樂帝）の宮に入るの時、建文君の幼子 帝の衣を牽き泣きて曰く、兒子 飢死す、と。帝 亦た泣きて曰く、爾 皇家に在り、豈に餓死の理有らんや、と。宮人に命じて之を^{やしな}嘯う」と。夫れ文皇帝（永樂帝） 建文君の幼子を忍びざれば、則ち建文君の祀無きを忍びざること、知る可し。且つ建文君 毎に諸將を戒めて曰く、輕しく皇叔（永樂帝）を犯し、後世をして不韙（過つ）の名有らしむこと母れ」と。其の尊尊親親の心 想う可きなり。昔、建文の事に死する諸臣もて文皇帝（永樂帝） 常に之を稱して「彼れ其の禄を食し、自から其の忠を盡す。夫れ臣に在りて忠と為せば、則ち其の忠とする所の者、知る可し」と^い曰う。我が皇上（神宗萬曆帝） 登極の初め、文皇帝（永樂帝）の忠を憫れむの至意を推して、首に發明し詔して「凡ての事に死する諸臣は皆な其の郷に祀るを得、又た言官の凡ての諸臣の墳墓は咸な修治を蒙り、苗裔は咸な卹録を蒙ることを議（提案）するを允す」と。而して建文君に於いては獨り否とす。是れ臣有りて以て君を^{なみ}無するを可とするなり。況や廟堂の上に之を諱みて言い、野史は則ち已に之を繁く言うをや。今 釐正を爲さざるに^{あやま}失てば、萬世より下必ず之を正す者有らん。伏して乞う皇上（神宗萬曆帝）

祖宗の情の必ず至る所を體し、倫常の然らざるを得ざる所を察し、禮部に勅し、廷臣を集め建文君の尊諡を追崇し、廟祀を増立し、其の年號を復^④し、山陵を封表（陵墓を修復する）し、用って一代の闕典を補わんことを會議せしめよ。如し太廟を以て祔（合祀）を議し難ければ、則ち懿文太子の陵廟に祔主（合祀）せんことを請う。一體に祭りを致せば、則ち皇上（神宗萬曆帝）の達孝 萬世に傳流せん、と（『讀禮通考』卷九十三・葬考十二・山陵六・六葉～八葉・「建文帝」条所引「南京大常寺志」）。

① 萬曆『實錄』・「國榷」では、九月九日となっている。

② 本稿「建文帝の諡号について (1)」p142～p143の「永樂帝の即位の詔」参照。

③ 注2参照。

④ 「建文」の年号の復活については、以下で検討する。

建文帝は、太祖洪武帝の孫・懿文太子の嫡子であり、正式な皇太孫であった。帝位に就き天下に五年君臨した。寛仁恭讓で、大きな失徳はなかったが、文柔不斷で、変革に序がなく、親族に怨まれた。永樂帝は、太祖洪武帝の教えにしたがって靖難の兵を挙げた。そして、建文帝は位を譲った。だからこれは、家庭内の讓禪であって、易姓革命ではない。建文帝が亡くなると、永樂帝は嘆き、天子の禮で葬った。ただ、当時の利権を手に入れた輩が、自分のちょっとした損得にくよくよして、建文帝の祭祀・諡号・帝陵などを考えなかった。そのため二百年にわたって、大きな欠典となった。これは、永樂帝の過失ではない。生まれて天子となりながら、亡くなって諡号もなく、先祖と一緒に祭られず、個人的にも祭祀されない。これは、人々の悲しむところである。また、永樂帝は、建文帝の子供に対しても気を使った。そこからすると、建文帝が祭祀されないことを気にかけていたことは理解できる。その上、建文帝も永樂帝のことを気にかけていた。その尊尊親親の心が理解できるであろう。いまの陛下（神宗萬曆帝）も、即位直後に建文帝の臣を表彰された。しかし、建文帝に対してはそうしなかった。いま、正そうとしなかったら、後世に修正されてしまう。そこで陛下（神宗萬曆帝）、建文帝の号を追崇し、廟を建て、年号を復活し、陵墓を治めて、これまでの失策を正すようお願いしたい。ただし建文帝個人の祭祀がむずかしければ、懿文太子の廟に合祀してもらえばよい。合同祭祀すれば、陛下（神宗萬曆帝）の達孝は、万世に伝えられるであろう、という。

「建文」の年号については、萬曆二十三年九月十六日に復活させる詔がでている。なのに、劉曰梧は、萬曆三十八年（一六一〇）九月九日に年号の復活を提案している。これは、矛盾しているのではないかと黄雲眉は考えた。黄雲眉は、『明史考證』（一九七九年・中華書局刊）でつぎのように指摘する。

〔萬曆二十三年〕九月乙酉，詔復建文年號。

按ずるに『實錄』に據れば、禮科給事中の楊天民 先に此の請有り。疏所司に下り、御史の牛應元 復た允行を斷在するを請いて「成祖の徳を以て、以て聖孝を昭かにし、以て信を天下萬世に傳えん」と。礼官の范謙等

覆奏して、又た謂う「夫れ革除と云う者は、後世 復た建文有るを知らざらしめんと欲するのみ。今、年二百を歴て、世十葉（代）を歴、建文君有るを知らざるものなし。今日の聞見 已に[糊]塗^{けが}す可からず、何ぞ況や後世をや。天下萬世 自から耳目有り。稗官野史 各々紀載有り。建文の紀年を以て洪武の虚號に作らんと欲するも、得んや」と。詔もて建文の事蹟を以て太祖高皇帝の末に附して、其の年號を存す。然れども[萬曆]三十八年九月に至り、南京太常寺少卿の劉曰梧が、仍お廷臣を集め、建文君の尊諡を追崇し、廟祀を増立し、其の年號を復し、山陵を封表するの請に應ずるや否やを會議する有り。則ち是の時（萬曆二十三年九月十六日）、其の年號を復するを允すと雖も、實は未だ嘗て復せざるなり（『明史考證』明史卷二十（神宗紀一）考證・第一冊・二〇八頁・「九月乙酉、詔復建文年號」条）。

神宗『實錄』によれば、楊天民が建文の年号の復活を求め、牛應元がそれを請い、范謙などが覆して復活を求めた。その結果、[萬曆二十三年九月に]年号は復活した。ところが、萬曆三十八年（一六一〇）九月に、劉曰梧が年号の復活を求めている。ここからすると、復活を認めたものの、実際には復活していなかったのだ、という。

たしかに、検討してきたように「建文」の年号を復活させよという詔がだされた後になっても、劉曰梧が「年号」の復活を求める疏を提出している。ではなぜこのようなことになったのであろうか。

繰り返しになるが、『明史』神宗本紀には、

[二十三年九月]乙酉（十六日）、詔もて建文の年號を復す（『明史』卷二十・本紀第二十・神宗一）。

とあり、

萬曆『實錄』には、

詔もて建文の事蹟を以て太祖高皇帝の末に附して、其の年號を存す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・

「萬曆二十三年九月乙酉」条)。

とある。

『明史』からすると、すべてにわたって「建文」の年号を復活させたようにとれる。しかし、萬曆『實錄』によると、太祖洪武帝の末尾に、建文帝の「事跡」を「建文」の年号を用いて附記することを認めたということになる。

いま、『國權』の、

詔もて建文の年號を復し、太祖高皇帝紀の末に附す……（『國權』卷七十二・「神宗萬曆二十三年九月乙酉」条・四七五九頁）。

の条を見ると、談遷（字は孺木。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）自身がつぎのようにコメントを付け加えている。

談遷 曰く、建文の年〔號〕は復す。而れども〔建文帝の〕「少帝實錄」は、緒に就くと聞かず。豈に〔復活の詔が出た〕當時 虚しく尺一（天子の詔書）を〔糊〕塗せんや。抑そも陳相國（陳于陞） 捐館（亡くなる）の後、同正史 之を佚するなり。泄泄（怠る）として風を成す。史事に于いても猶お然り。況や其の他の實政をや（『國權』卷七十二・「神宗萬曆二十三年九月乙酉」条・四七五九頁）。

「建文」の年号は復活したけれども、建文帝の「實錄」は緒に就いたとは聞いていない。復活の詔が出た当時、むだに詔を糊塗したのだろうか。いったい陳于陞が亡くなってから、失われたのである。そして、怠惰な風潮が蔓延した。歴史の編纂においてもそうである。ましてやそのほかの政治についても同じだ、という。

陳于陞の没後、建文帝の「實錄」編纂が頓挫したというのであろう。建文帝の「實錄」編纂が頓挫したということは、「建文」の年号を記した「實錄」が存在しないことである。すると、実質的には「建文」の年号は復活しなかったということになる。

ここで劉曰梧が年号の復活を持ち出したということは、実質的には編纂が頓挫した「實錄」をすみやかに編纂してもらいたい、という提案なのであろうか。

では、陳于陞（字は元忠，号は玉壘。四川南充の人。隆慶二年戊辰科二甲七名の進士）は，建文帝の「實錄」とどうかかわったのであろうか。続けて考えてみたい。

(つづく)